



ファッショントップ > ファッション > 記事

【インタビュー(前編)】メゾン タクヤ:フランソワ・ルッソ ～アンドレ・プットマン女史やジャック・エリュ氏との出会い、そして別れ～

2013年06月05日 13:11 発信地:東京 [📍](#) [🌐](#)



「メゾン タクヤ (MAISON TAKUYA)」のデザイナーのフランソワ・ルッソ (Francois Russo)。©MODE PRESS / Ken Shimizu

関連写真

<< 1/4 (全22枚) >>



<< 1/4 (全22枚) >>

[ブログに利用する](#) [拡大写真を見る](#) [スライドショー](#)

【6月5日 MODE PRESS】「一部の妥協も許さない、完璧な革製品」をコンセプトにフランス人デザイナーのフランソワ・ルッソ (Francois Russo) が手がける「メゾン タクヤ (MAISON TAKUYA)」は、アジアとヨーロッパの優れた技術を融合させた屈指の高級皮革製品を展開するブランドだ。厳選された天然素材を用い、手作業で1つ1つ仕上げられたアイテムは、NYハーグドルフグッドマン (Bergdorf Goodman) やパリ・コレット (Colette)、日本では阪急メンズ館や伊勢丹メンズ館でも取り扱われており、今世界的に高い評価を得ている。

■インタビュー:フランソワ・ルッソ

ーそもそも広告代理店に在籍してアートディレクターとして仕事をしていたところから、高級メゾンのブティック内装を手がけたり、ハイブランドのコンサルタントとして数々の商品やキャンペーンを仕掛けてきましたが、それらすべてに通じることは？

F:私にとっては基本的に全てのそう、これまでの活動は突き詰めれば4つの要素にたどり着くと考えています。一つは素材、2つ目は形、3つ目は光、4つ目は色。写真を撮るにも、ものをつくるにも、ブランドも、アイデンティティを考へるにも、全て何が重要で、何を整理して捉えなければいけないのか、を考へる上で、この4つの要素が非常に大事です。そこを突き詰めた上で、どのようについにまとめるか、というところでアイデンティティの表現や、ダイレクションに結びついていくものがあるので、私にとって様々な活動をしてきたといわれているんですけど、本質は同様のものかと思っています。アートディレクションをとって、方向性を決めるお仕事に関わる中で、そういうことだったら、「君のアイデアをお店にしてみたらどうなるか、担当してみたいか」と言われ、「そのお店を君だったらどうするか？」と言われ、「この写真をどうい風に撮ったら一番人に伝わるか」と言われ、それに対応してきました。自分からこれにチャレンジしてみたいというよりもむしろ、周りの方から自然発生的にこういふ風にしてみたらどうだろうかというお話を聞いて、それに対面していくなかで活動が広まったというのが実際の流れですね。

ー転職となったお仕事は？

F:すべての始まりはアンドレ・プットマン (Andre Putman) さんとの出会いですね。僕の人生において大きな影響を及ぼしたと言っていていいでしょう。彼女とは年が離れていましたが、20年以上、彼女が亡くなるまで本当に仲のいいお友達であり、仕事のパートナーでした。生前は、毎週日曜日になると、互いのお客様や仕事について、2時間くらい電話で話合っていました。

当時私はまだ小さなイメージジェンシーを経営していただけで、彼女とは個人的なお付き合いだったので、ある日彼女から連絡があって、「私のキャリアでこれまで一度も起こったことがないような出来事が起きたの！ベルナール・アルノー (Bernard Arnault) さんが私のプロジェクトにNGをだしてきたのよ。こんなことありえないわ。ちょっと悪いけれど明日私の事務所に来て、プロジェクトを見てもらえない？」と連絡がありました。

それは、シャンゼリゼ通りにあるグランのブティックのお仕事でした。翌日、彼女の元へ行きプロジェクトを見ると、洗練されていて、細部に品があり、非常にいい内容でした。しかし、グレーやブラウンを基調とした、それはどうみても「アンドレ・プットマン」そのものでした。女性の美しさや華やかなイメージのグランとはちょっと違うとも感じました。そういう意味ではアルノーさんの気持ちが分からなくないといった印象でした。正直にそのまま伝えたとこ、その瞬間プットマンさんは、図面を投げつけてしまい、じゃあ、あなたがやりなさい！というようなことがありました。しかし、アルノーさんは「アンドレ・プットマン」の企画が欲しいわけですから、プットマンさんが冷静になったところで、改めてきちんと僕がお仕事をお手伝いするというので、このプロジェクトはスタートしました。

結果、彼女らしく、そしてなによりもグランらしいプロジェクトになり、アルノーさんは喜んでくれました。この一件が終わったところで、プットマンさんから今みたいな小さい事務所はどうなのかしらね？一緒にくっつけちゃわない？なんていうことを言われて、お互い一つの成果をシェア出来たということもありお仕事を一緒にさせていただけたくことになりました。やはりプットマンさんは非常にフランスでは社会的にも名声を得た女性だったので、女性の会社にきちんと参画して、立ち上げたということで名だたるブランドの仕事は沢山手がけることができました。



TOPICS ファッションニュース



- エルメス創業者一族が共同CEOに
- ヴィヴィアン・ウエストウッドがデモに参加
- 名物編集者、菅付雅信氏にインタビュー
- テイラー・スウィートのファッションチェック
- ヴ・ベッカム、子どもたちについて語る
- ナックルダスター・バッグ=危険物？！
- 【動画】表参道で「能作展」、25日まで

RECOMMENDED おすすめ

MODE PRESS 翻訳スタッフ募集
翻訳スタッフ/学生アルバイトを募集いたします。応募はこちらから

『めめめくらげ』
あの村上隆が映画監督に、4月26日ロードショー

13年春夏パリ・オートクチュール
トップメゾンが警を尽くした新作オートクチュールコレクション

【連載】ファッションに未来はあるか？
ジャーナリスト・上間常正による連載全6回を一気にチェック！

marie claire style
マリ・クレール スタイル公式サイト
人気ブロガーのルイズ・エベルも登場！最新情報をお届け！

DIRECTOR 編集後記
MODE PRESSディレクター岩田による編集後記はこちら！

RANKING ランキング

アクセストップ10 [ブロガー人気トップ10](#)

写真 | テキスト

- ドルチェ & ガッバーナの創業者2人に禁錮2年半求刑、イタリア
- 第55回ヴェネチア・ビ...
- 「スーパーカービルド...
- ワールド オーシャン...
- < senken h 1... >
- 豪華ゲストが集結、「シ...
- カラフルな伝統衣装、チ...
- ダートーンの目元メイ...
- ピョンセ、「H&...
- <動画>イール国際モ...

ーシャネルはこういった経緯でどのようなお仕事だったのですか？

F: そういった形でブットマンさんを通じて、他にも様々なブランドとお仕事させていただきました。ただシャネルに関しては、フランスを代表するブランドの一つとしてブットマンとなかなか縁がなかったブランドでした。今はもう亡き、シャネルのアートディレクターをされていたジャック・エリュ(Jacques Helleu)さんと出会ったことで、その後僕はシャネルとお仕事をさせていただきました。ジャックさんとは色々なところでお会いする機会はあるのでご挨拶は毎回おさえていたんですけど、非常にクールな方でなかなか近づきがたい方でして……ご挨拶しても「ボンジュール」と手は差し伸べられるんですが、お互いの距離が2メートルくらい離れているみたいで、そんな緊張感のある関係でした。

ある日、ジャックさんの奥様と非常に仲良かった僕の親しい友人が、ジャック夫妻とディナーを共にするから一緒に来ない？と誘ってくれました。お食事そのものは楽しい時間を過ごしたのですが、ジャックさんは、やはり氷のようにクールな存在で、その横顔には社交上手で非常に楽しい奥様がいらっやあって、、、話が弾むなか、急にジャックさんが「ところでブットマンさんは具体的にどういうお仕事をしているのかね？」と聞いてきました。緊張感が走るなか、いろいろなお話をしましたが、その日の食事は期待していた様な、何か起きることなくお静かになりました。が、その1ヵ月後、食事をオーガナイズしてくれた方から連絡があって、「ジャックさんの奥様が主人が僕の携帯番号を覚えて欲しい」と電話がありました。そんな聞くまでもないことなので、すぐに連絡先を先方に伝えて貰うことになりましたが、そこから次のアクションまで、待てど暮らせど一向に連絡がない。待ちくたびれて、諦めようと思ったりと連絡がきて、翌週に食事をしようと言われました。そしてお会いしたその場でシャネルのビジネスコンサルタントとして参画してほしいとオファーを受けました。これまでと違ったのは、今回はブットマンさんとの仕事ではなく、僕個人への仕事のオファーでしたので、快諾することにしました。

ージャックさんの思い出で印象的なことは？

F: 彼はシャネルのなかで、本当に素晴らしい業績を上げた方でしたが、洋服をデザインしたわけではないので、なかなか多くを語られることがありませんでした。今ではシャネルのなかでも人気の「J12」シリーズをはじめ数々の名品を世に送り出してきたにも関わらず、彼の名前が語られることがない。今考えるとこれも非常に運命的なものを感じますが、彼が亡くなったときに、イタリア・トリノの高級家具メーカー、Poltrona Frau社から依頼を受け、僕は椅子のデザインをしました。そして、その作品に、彼の名前を付けることができました。奥様や息子さんにも睡眠したら、非常に喜んでくださったので、彼の功績と名前を後世に残す意味も含めて、私が心をこめた製品に「Helleu Chair」と彼の名前が付けられるという小さな奇跡が起こりました。

人生において、本当に驚くようなことが自分の身に実際起こっている瞬間、何が起きているのかと捉え直すことがあるんだと、ジャックさんという人物を通してシャネルの仕事をしているときは思っていました。今よりもまだまだ僕も若かったこともあり、彼も寛大に構えてくれていました。彼はこの世界のなかで、こんな風になれたらなという神様のような人だったので、同じ場を共有していてもどうしたらいいかわからなくてどきまぎしてばかりでした。そんななかで、自分を表現するだけなんておこがましいと思うことさもありましたが、初めてお会いした食事の席で、「これはたまたま食事を君としているのではない。理由があるからしているんだよ」と言われました。そのとき、全身に鳥肌が立ったのを今でも鮮明に覚えています。(続く) ©MODE PRESS


クリッピングする ツイート 3 おすすめ 0

【このニュースをブログなどに利用する】 → 利用方法について



PR MODE PRESS公式iPhoneアプリで最新ニュース記事をチェック
PR 最大70%オフセール開催中！編集部が選んだyoox.comアイテムはこちら

必読記事 月・水・金 更新



【連載: 谷川じゅんじの「アタマの中」】“能作”展を通して伝えた日本のユニークネス (写真1/9枚)

- 仏ファッションブランドを脅かす、パリの治安問題 (写真2/9枚)
- <動画> イエール国際モード&写真フェスティバル、昨年の受賞者のショーも (写真1/4枚)
- 豪華ゲストが集結、「ショートショートフィルムフェスティバル&アジアパーティー」 (写真1/7枚)
- ヴィヴィアン・ウエストウッド、軍事機密を流した米兵支持のデモに参加 (写真4/8枚)
- ダークトーンの目元メイクがポイント？今年のMETガラを復習 (写真1/9枚)
- 【連載: 谷川じゅんじの「アタマの中」】“能作”展を通して伝えた日本のユニークネス (写真1/9枚)

↑ 上へ戻る

【サイトポリシー】 【利用規約】 【お問い合わせ】 【ヘルプ】 【お問い合わせ】
【リンクバナー】 【広告掲載について】 【運営会社】 【サイトマップ】 【RSS 配信】



ファッショントップ > ファッション > 記事

【インタビュー(後編)】メゾンタクヤ:フランソワ・ルッソ ～ブランドの立ち上げ、そして“ラグジュアリー”が進む方向～

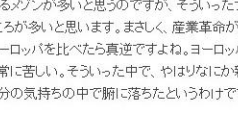
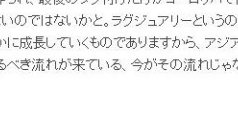
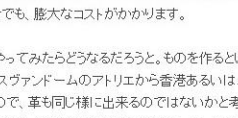
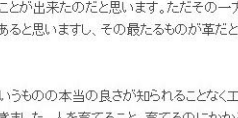
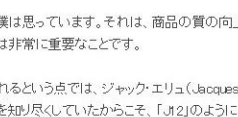
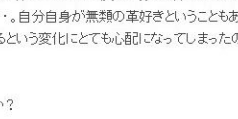
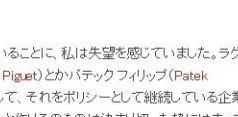
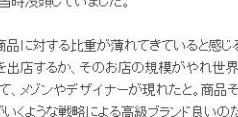
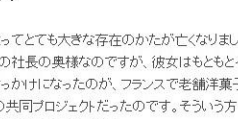
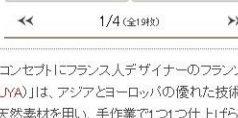
2013年06月05日 13:59 発信地:東京



【メゾン タクヤ(MAISON TAKUYA)】のデザイナーのフランソワ・ルッソ(Francois Russo)。©MODE PRESS/Ken Shimizu

関連写真

<< 1/4 (全19枚) >>



【6月5日 MODE PRESS】「一部の妥協も許さない、完璧な革製品」をコンセプトにフランス人デザイナーのフランソワ・ルッソ(Francois Russo)が手がける「メゾン タクヤ(MAISON TAKUYA)」は、アジアとヨーロッパの優れた技術を融合させた屈指の高級皮革製品を展開するブランドだ。厳選された天然素材を用い、手作業で1つ1つ仕上げられたアイテムは、NY・バーグドルフグッドマン(Bergdorf Goodman)やパリ・コレット(colette)、日本では阪急メンズ館や伊勢丹メンズ館でも取り扱われており、今世界的に高い評価を得ている。

■インタビュー:フランソワ・ルッソ (前編からつづき)

—さまざまな仕事を経て、高級品市場に対して当時感じていたことは？

F:非常に素晴らしい人や企業と仕事をしていなかで、昨年、僕にとってとても大きな存在のかが亡くなりました。エルメス(Hermes)一族のレナ・デュマさんです。先代のエルメスの社長の奥様なのですが、彼女はもともとインテリアデザイナーでした。そもそも僕がインテリアのデザインをするきっかけになったのが、フランスで老舗洋菓子店「ドワロイヨ(DALLOYAU)」のお仕事でした。実はこれはレナさんとの共同プロジェクトだったのです。そういう方々と本気でい時期に情熱をもってラグジュアリーな世界を作ることに関与していました。

ただ、やはり高級品市場がビジネスとして大きくなればなるほど、商品に対する比重が薄れてきていると感じるようになってきました。そうではなく、逆にどんな手法をするか、どんなお店を出店するか、そのお店の規模がやれ世界一だ、やれこっちの方が一番だった、やれ新しいなどという話題を掲げて、メゾンやデザイナーが現れたと、商品そのもので勝負することを後回しにして、それ以外の部分にばかり目がいくような戦略による高級ブランド良いのだからと...疑問を持ち始めました。

中でも特に皮革業界の商品に対するスタンスがどんどん変わっていることに、私は失望を感じていました。ラグジュアリー全般の中でも、例えば時計はオーデマピゲ(Audemars Piguet)とかパテックフィリップ(Patek Philippe)のように昔ながらの職人しか出来ない技をきちんと踏襲して、それをポリシーとして継続している企業も何社か残っていますが、それが革となるとほとんどすべてがデザインと作りそのものは決まり切った枠にはまっています、工業的な方向になってしまっている。これはどうしたものかと...。自分自身が無類の革好きということもあって、どんどん自分の満足いく商品が見つけられない状態になっているという変化にとても心配になってしまったのです。

—そこからどういった経緯でブランドを立ち上げることになったのですか？

F:高級素材の進化、特に工業化に伴った特化した製品には2タイプあると僕は思っています。それは、商品の質の向上により大きく貢献するものと、商品の付加価値に繋がらないもの。これは非常に重要なことです。

工業化が進んだ“ハイテク”をラグジュアリーブランドにうまく取り入れるという点では、ジャック・エリュ(Jacques Helleu)さんから学んだものは大きかったですね。やはり彼らすべてを知り尽くしていたからこそ、「J12」のようにセラミックを時計に取り入れたり、高いメカニズムに落とさず組み立てることが出来たのだと思います。ただその一方で機械で作ると、手仕事の味わいが全く損なわれてしまうというものもあると思いますし、その最良なのが革だと思えます。

じゃあ、何故商品が良くなる方向になるはずなのに、ハンドメイドというものの本当の良さが知られることなく工業化が進んでいるのだからって考えたときに、コストの問題なんだと気がつきました。人を育てること、育てるのにかかる時間、機械ではなく人が作ることに費やす労力。それらを考えただけでも、膨大なコストがかかります。

その問題を考えたときに、ちょうど変革期に入ったところで自分でやってみたらどうなるだろうと、ものを作るということにおいては、特にハイジュエリー、宝石類の工房がどんどんプラスヴァンドームのアトリエから香港あるいはパナマなどにモノ作りの場を移しているという事実が如実なもので、革も同じ様に出来るのではないかと考えました。出来るのではないかとより、そういう風に全てが海外で作られ、最後のタグ付けだけがヨーロッパで行われることで、フランス産と呼ぶというのはラグジュアリーとは言わないのではないかと。ラグジュアリーというのはやはり市場として国としてもどんどん発展を遂げていく中でより豊かに成長していくものでありますから、アジアで作ってアジアから発信するラグジュアリーなブランドが生まれてしかるべき流れが来ている、今がその流れじゃないかなと思ったわけです。

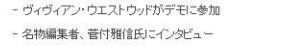
特にヨーロッパのラグジュアリーブランドは、100年以上の歴史があるメゾンが多いと思うのですが、そういったブランドがヨーロッパで掲げているのが1850年代から1880年代というところが多いと思います。まさしく、産業革命が勃発して、人々の生活が変わり始めた時代なので、その時期と今のヨーロッパを比べたら真逆ですね。ヨーロッパは今衰退の一途をたどる状態で、ヨーロッパの生活も国の状態も非常に苦しい。そういった中で、やはりなかなか新しいことをもって発展させていこうと考えたときに、アジアという地が自分の気持ちの中で胸に落ちたというわけです。



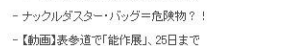
TOPICS ファッションニュース



インタビュー:「メゾン」...

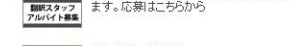


セレブに学ぶ、ファッション...

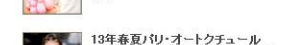


16歳のファッション...

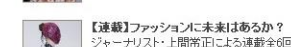
RECOMMENDED おすすめ



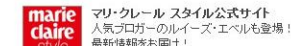
MODE PRESS翻訳スタッフ募集...



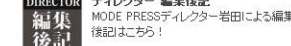
『めめめくらげ』...



13年春夏パリ・オートクチュール...



【連載】ファッションに未来はあるか?...



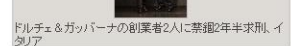
marie claire style...



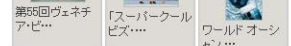
DIRECTOR 編集後記...



RANKING ランキング...



アクエストップ10...



プロダクト人気トップ10...

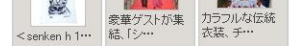


写真 | テキスト...



ドルチェ&ガッバーナの創業者2人に禁錮2年半求刑、イタリヤ...



第55回ヴェネチアフェビ...



「スーパークール」...



ワールド オーション...



変革ゲストが集結、13年...

ーアジア、とりわけ日本との縁はいつ頃からあったのですか？

F:アジアということを考えたときに、僕にとってやはり日本の影響というのは非常に大きかったですね。日本には素晴らしいブランドが本当にたくさんあって、「コム デ ギャルソン(Comme des Garçons)」や「イッセイミヤケ (ISSEY MIYAKE)」などを筆頭に名前を挙げればきりがありません。しかしそれらは、“ファッションブランド”であって“ラグジュアリーブランド”ではないんですね。「コム デ ギャルソン」や「イッセイミヤケ」は例えるなら、モダンなチャンネル(CHANEL)。“ファッション”を作るために生まれたブランドで、“ラグジュアリー”であるエルメスなどとは一線を画していると思うのです。

その“ラグジュアリー”というものを考えたときに、日本が僕に与えた大きな影響のひとつが、実は食べ物なんです。いまから20年ほど前、パリでは今ほどに和食というものが知られていなかったときに、「衣」川がオープンしまして、父親がよく日本に出張していた関係もあって12歳くらいだったと思うのですが、連れて行ってくれました。そこで和食を食べてはじめて、“なんだ、このシンプルでミニマムなのに高級感漂う食べ物！”と衝撃を受けました。

ヨーロッパ特にフランスの場合、カトリック文化に代表されるかもしれませんが、華美で威圧感があって、さあこれだけの大きなもので皆さんを救いましょう！という流れが強いじゃないですか。ではなくて、物事の価値の核心を削いでいってこれが価値観だ！という部分の表現に僕は衝撃を受けたのです。

食べ物で日本とフランスを比較すると両者の違いが際立つと思います。それぞれのドアを開いてみるとまったく別の世界がある。フランス料理というのは複合的な料理と云うか、どんどん複雑にちょっとうごくなっていくかわからないようなソースをかけ、それが何か風ですと足し算して作っていく料理だと思うのですが、日本のお料理はまさしくless is beautifulと言いますか・・・最高の食材を使ってそこになるべくなにかを加えないことを信条にしているところがあると思います。それに加えて、パーフェクトに作るということではなく、どこか不完全なバランスで、そこがその味になると言う部分を残したそういう世界ではないかと自分は感じているんですね。その点、ヨーロッパ人というのはミニマリズムというもの、引き算が下手ですね。

僕にとってはそのミニマムな削ぎ落とした価値観で勝負が出来るラグジュアリーはすごく価値を持っている。それが「メゾン・タカヤ」のブランドの底流に流れているものなのです。ですから、このブランド名も日本とフランスの要素を取り入れたかった。このブランドを新しいもっと広い意味でのアジア、広い真んな革という業界がなかったところできっかりと花味かせていきたいと思っています。

ー「メゾン・タカヤ」が目指す先とは？

F:もちろんそういう気持ちでスタートしているのですが、運命というのは最後まで分からないもので、この考え方があったからといって成功に結びつくかは分からない。それがどうなるかわからないところが人生の醍醐味です。自分としてはそこで一歩踏み出すことで、その踏み出した一歩を見た皆さんが何かを感じてくださって、それを自分自身でも確かめながら次のステップを踏み、そこを繰り返していく中で何か新しいラグジュアリーが本当にアジアからも出てくる、ということを感じて欲しい。

最初はほんの小さな発想であっても、やはり感情が人を高めていくという部分はすごく大きいと思います。それを受け止めて、その感情に同調していった人たちが集まってくると、一人では比べ物にならないくらい大きなパワーになりますね。ですから、それを実現するにあたってまず、自分の生産現場、工場を作りました。その工場で自分のスタッフに対しては、なにをしなければいけないのかではなく、なぜそういう物づくりをしなければいけないのか、それをみんながしっかりと理解してもらうこと時間と労力を費やしました。

なぜそうしなければいけないのか、ということがちゃんとわかっていて、それを担当する人と、その人の周りの人たちが同じような角度から、その前後の仕事を流れてとしてやっていくというのを理解出来たら、1つの完成された形に作っていくことが出来る。それはある意味オーケストラと一緒に、各パートがただ上手に演奏できるというだけではなくて、その楽器と演奏者たちがたくさん集まって、一つの感情を持つ音楽を奏でていく、のと同じプロセスです。そうして出来上がった商品を、今度は一般の市場に出すことで感情のこもった商品を受け止めてくださるお客様も出てきて、それが広がっていく流れが出来たらいいなと。

ー色々な思いを語っていただきましたが、こと日本の市場について今何か感じていることはありますか？

F:日本は、ラグジュアリーの消費を常にリードしてきた国ですし、ここ日本でラグジュアリーブームがあり、それがパワーとなり世界的な産業としてどんどん広がっていった、という意味では今も大きなパワーを持ち続けている国だと思います。逆に言う日本企業と消費者はそういうものをすでに経験しているわけでは、見ているだけではなくて、それを自分で買い、作ってきて、その結果、そのお客様たちがブランドやラグジュアリーに対して何を感しているかが、そろそろ変化しても良い流れに来ているとも思います。日本の消費者たちはそんな大変な状態のなか生活を続けてきていると思うんです。その変化の過渡期というのは確かに消費者の動きの中に現れてきていて、消費者がその商品に対してどんな価値観を感じているのかと言うのを見直す時期に来ていると思います。

ーラグジュアリーの行き着くところはどこなんでしょうか？

F:ヨーロッパの状況は非常に厳しい中であって、ヨーロッパ全体が非常に疲弊しています。あちこちで問題だらけで・・・こんなに豊かな美しい遺産をたくさん積み重ねた地域でありながら、今本当に大きな財産を残されて、ほとんど残された孤児が、私たちこれを残されてどうしたらいいの？と途方に迷っているような状態です。

先日、自分が体験した一例ですが、僕はパーソナルなお手紙を書く時に愛用していた手製のレターセットがありました。かなり分厚い手製の紙で、エッジのところに金メッキを施してあるのですが、いままでパリで有名な古い文房具屋さんに買いに行っていました。しかし、先日そのお店に同じ物を買に行ったら、その紙を仕上げの技術を持った職人が去年亡くなってしまったのでこの紙をつくる人が居なくなっちゃったといわれました。

ーメン/タクヤでは「伝統の継承と革新」を実践しているということですね？

F: 革に関して、「産業が死ぬ、死なない」ということが言われています。それを支えてきた一人ひとりの職人さんたちが寿命を全うしてどんどん亡くなってしまって、今までその人がいなかったら後、その人たちがやってきた技術を受け継ぐ人が居ない。そういうことが受け継がれてなくて、全く亡くなるのだったら、亡くなる前に、それを受け継ぐ人がいる受け皿を作ってきちんと残して、今の時代に合ったものとして新しく築いていくべきだと思うのです。そうであれば、気がついたときには本当になくなってしまおうという、非常に危惧すべき状況じゃないか私たちは生きています。

コストと利益率だけを計算して、産業として成り立たせるものじゃないと思いますよ。お金がかかってもここはこういう風にしなれないといけない、というものがたくさんあって、その中で私たちがこだわっているものの中に、手縫いという技術があります。ミシン縫いが悪いといっているわけではないのですが、比べたときに強さはもちろん、長く使えるということや、美しさ、全てにおいてやはり手縫いの方が勝るのです。そうしたら手縫いでやらないと、という風にありますよね。

リーマンショック後に、拠点をバリからタイへ移しましたが、最初は5人のスタッフとテーブルを囲んで物作りをはじめました。本物のラグジュアリーには、大きなものはなにもいらなくて、必要最低限の道具と職人さえいればいいのです。この5年で工場のスタッフは150人(モノ作리스タッフ)にまで増えました。というのも、とあるご縁がありましてオーディマ ピケのオーナーファミリーの皆さんが私の価値観を理解し、株主になってくださいました。その出資を得たことで、このブランドが果たすべきミッションと目指す方向へ向かうべく、環境が整いました。「メン/タクヤ」を通して、産業が生まれ、文化が育ち、人も育つ。果てしない夢のようにも聞こえるかも知れませんが、大きなことではなく、コツコツとしっかりと物を作り続けることで、アジアからラグジュアリーブランドが生まれると言うことを証明できればと思っています。(終)【岩田泰朗】©MODE PRESS

クリッピングする ツイート 0 おすすめ +1 0

【このニュースをブログなどに利用する】

→ 利用方法について



MODE PRESS公式iPhoneアプリで最新ニュース記事をチェック
最大70%オフセール開催中！編集部が選んだyoox.comアイテムはこちら

必読記事

月・水・金 更新



- 仏ファッションブランドを脅かす、Jの治安問題(写真2枚)
- <動画>イエル国際モード&写真フェスティバル、昨年の受賞者のショーも(写真1枚)
- 豪華ゲストが集結、「ショートショートフィルムフェスティバル&アジアパーティー(写真17枚)
- ヴィヴィアン・ウエストウッド、軍事機密を流した米兵支持のデモに参加(写真4枚)
- ダークトーンの目元メイクがポイント？今年のMETガラを演習(写真19枚)
- 【速報】谷川じゅんじのアタマの中”能作”展を通して伝えた日本のユニークネス(写真19枚)

↑ 上へ戻る

| サイポリシー | 利用規約 | お問い合わせ | プライバシーポリシー | ヘルプ | お問い合わせ |
| リンクバナー | 広告掲載について | 運営会社 | サイマップ | RSS | 配信 |

ファッションニュースMODE PRESS powered by AFPBB News | 掲載している写真・見出し記事の無断使用を禁じます。© AFPBB News